第3号　2008年 7 月

北海道大学 Hokkaido University Archaeological Research Center News Letter

埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集　カマド—台所の歴史—

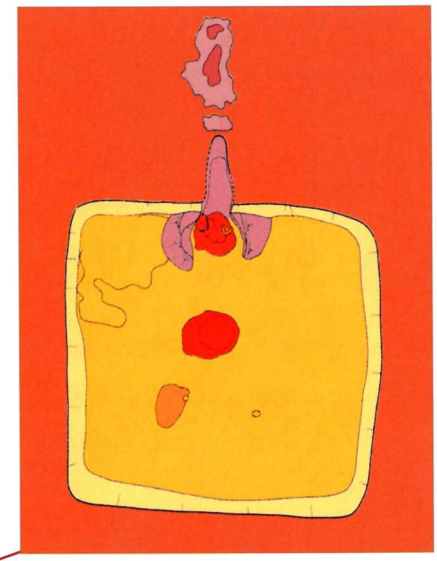
カマド（竈）とは、火を焚く周りを粘土や石などでドーム状に囲い込んだ加熱調理のための施設です。ドーム状の天井に煮炊き用の土器をはめこみ、住居の内側に開いた口から薪などの燃料を差し入れて燃やし、またそこから空気を送り込んで煙を屋外に流す工夫がしてあります。北海道では 7 世紀ころの擦文文化の開始とともに竪穴住居に作り付けられた厨房施設としてカマドが普及し、擦文文化が終わる 13 世紀ころに竪穴住居や土器とともに姿を消します。

北大キャンパス内（K39 遺跡・K435 遺跡）で発掘される擦文文化の住居址（じゅうきょし）にも必ずこのカマドが作り付けられています。擦文文化におけるカマドの登場と消滅は何を物語っているのでしょうか。本号ではキャンパスの地下に埋もれている台所の歴史の一コマを紹介します。

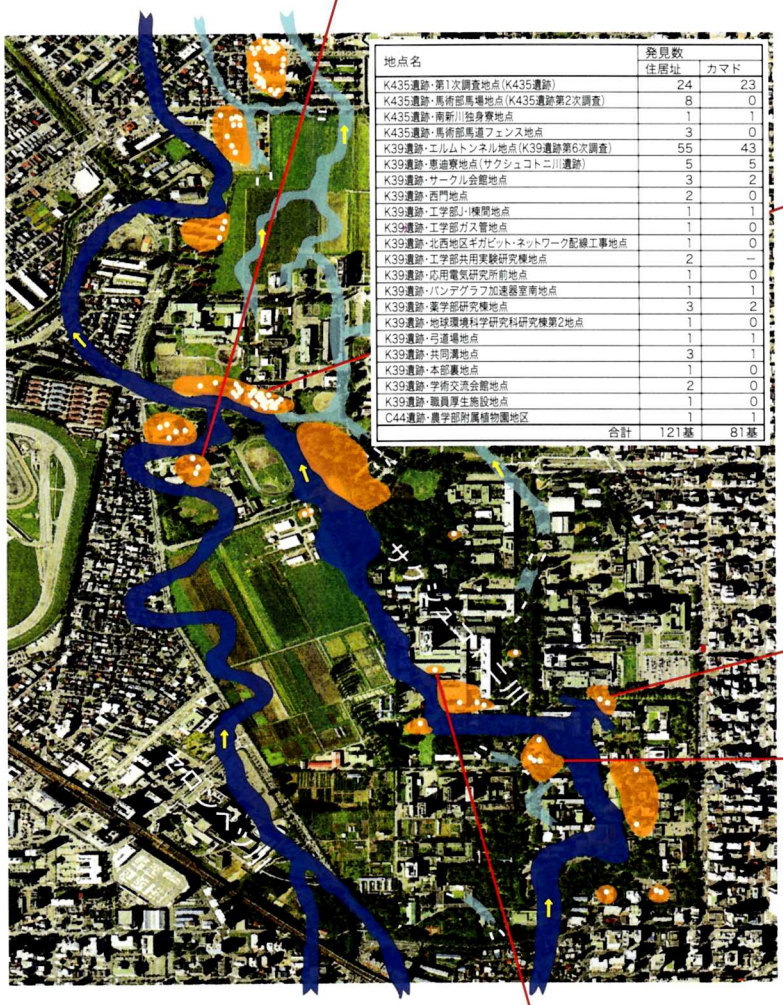
K39 遺跡恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）で発見された第 1 号住居址のカマド遺構（カマドの天井の掛け口に「甕（かめ）」と呼ばれる深鍋が掛けられたままの状態で発掘された希少例。1981-82 年発掘。写真はイラスト矢印の方向から撮影。）

■ 北大札幌キャンパス内で発見された擦文の竪穴住居址

▲ K39遺跡サークル会館地点
第2号住居址のカマド
（1980年発掘）



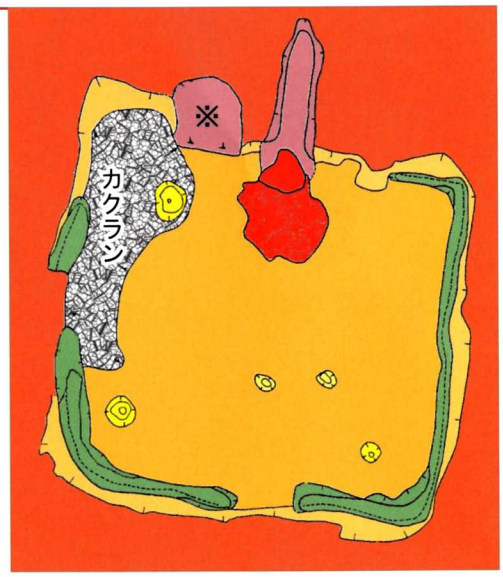
▲ K39遺跡エルムトンネル地点　カマドと共に伝統的な地床炉が併設されていた。（1998年発掘）



地点名	発見数	
	住居址	カマド
K435遺跡・第1次調査地点（K435遺跡）	24	23
K435遺跡・馬術部馬場地点（K435遺跡第2次調査）	8	0
K435遺跡・南新川独身寮地点	1	1
K435遺跡・馬術部馬道フェンス地点	3	0
K39遺跡・エルムトンネル地点（K39遺跡第6次調査）	55	43
K39遺跡・恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）	5	5
K39遺跡・サークル会館地点	3	2
K39遺跡・西門地点	2	0
K39遺跡・工学部J・I棟間地点	1	1
K39遺跡・工学部ガス管地点	1	0
K39遺跡・北西地区ギガビット・ネットワーク配線工事地点	1	0
K39遺跡・工学部共用実験研究棟地点	2	−
K39遺跡・応用電気研究所前地点	1	0
K39遺跡・バンデグラフ加速器室南地点	1	1
K39遺跡・薬学部研究棟地点	3	2
K39遺跡・地球環境科学研究科研究棟第2地点	1	0
K39遺跡・弓道場地点	1	1
K39遺跡・共同溝地点	3	1
K39遺跡・本部裏地点	1	0
K39遺跡・学術交流会館地点	2	0
K39遺跡・職員厚生施設地点	1	0
C44遺跡・農学部附属植物園地区	1	1
合計	121基	81基

▲ K39遺跡薬学部研究棟地点　第1号住居址　一辺8mの方形の大形住居址（赤○印がカマド）（2007年発掘）

：これまでに確認された擦文文化の集落址
：発掘調査で発見された擦文文化の竪穴住居址
：サクシュコトニ川とセロンペツ川
：埋没河川

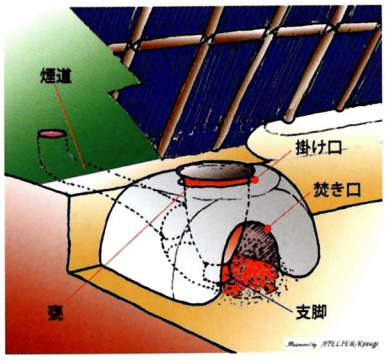


▲ K39遺跡弓道場地点　第1号住居址
旧サクシュコトニ川岸の低地にかかる緩斜面で発見された住居址。※印は、作り直した新しいカマドの隣に残された古いカマドの痕跡か、あるいは入口の造作か。（2007年発掘）

▲ K39遺跡工学部J・I棟間地点　第1号住居址　焚き口の両袖から屋外にのびる煙道が、粘土でしっかりと作られていた。（2000年発掘）

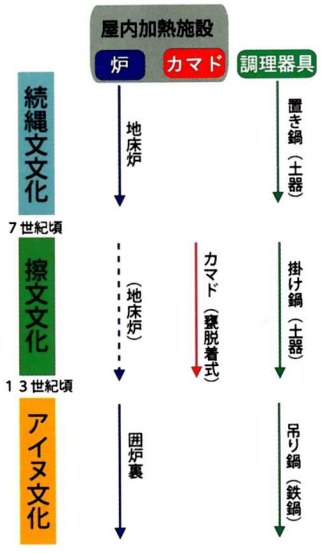
■ カマドの構造と使い方

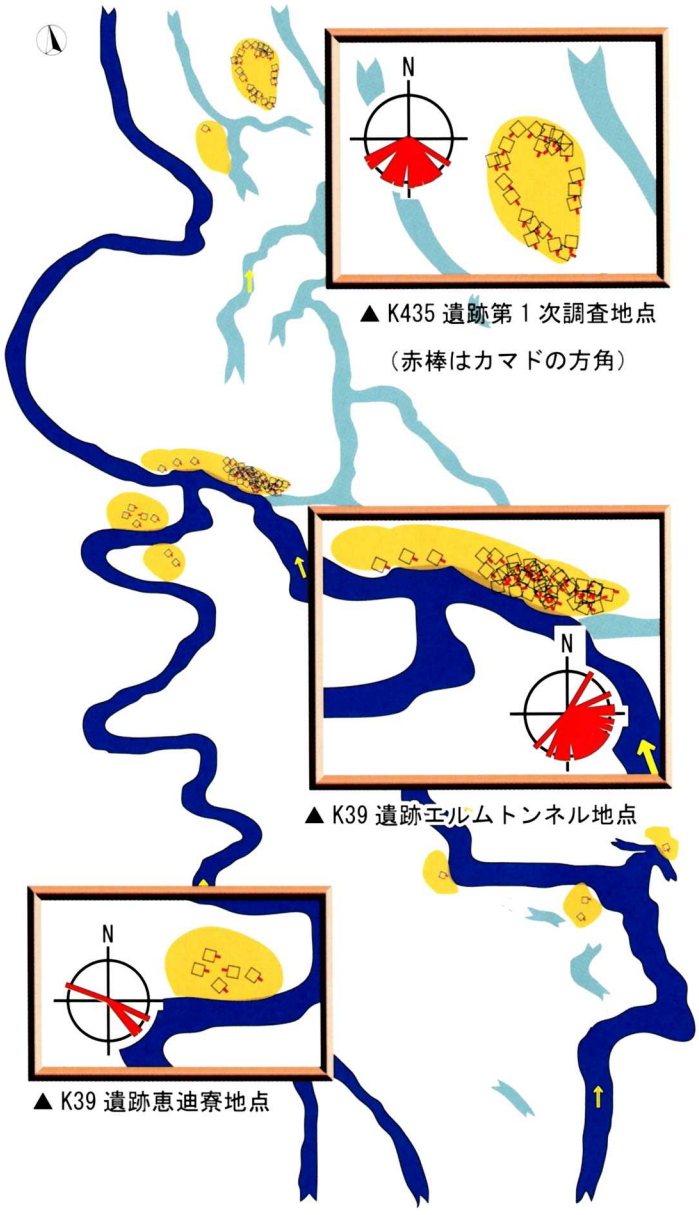
粘土で形作ったドーム状の本体、その天井に設けた「掛け口」に甕をはめこみ、住居の内側に口を開いた「焚き口」から燃料の薪をくべて、竪穴の壁に穿たれた「煙道」から煙を屋外に逃がします。焚き口から煙道へと空気の流れをコントロールして、カマド内の燃焼部の温度を効率よく上げることができます。炊事・採光・暖房の機能をも兼ね備える炉（続縄文文化の地床炉〔じしょうろ〕やアイヌ文化の囲炉裏〔いろり〕）と比較して、加熱調理に特化した施設です。掛け口には甕が固定されたタイプと掛け外し自由なタイプとがあります。また、甕への火の回りをよくするために、「支脚」で底を支え上げる工夫をしています。



■ カマドの終焉

竪穴住居から平地住居へ、土器（深鍋）から鉄製吊り鍋へ、そしてカマドから囲炉裏へ。擦文文化の終わりとアイヌ文化の始まりを告げる考古学的な現象です。

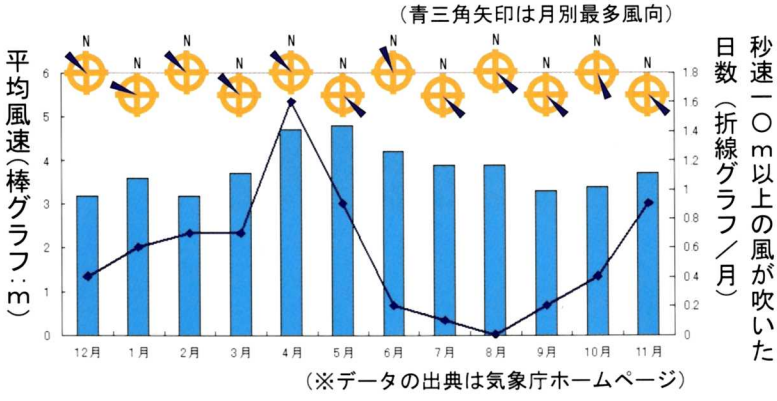




▲ K435 遺跡第 1 次調査地点
（赤棒はカマドの方角）

▲ K39 遺跡エルムトンネル地点

▲ K39 遺跡恵迪寮地点



■ 季節風と集落景観

カマドは空気をコントロールできる加熱効率の高い厨房施設です。その特性を十分発揮させるためには、煙道からの風の吹き込みによって煙が逆流するのを防がなければなりません。冬季の北西の季節風を避けるかのように、発見された擦文文化の竪穴住居址の多くは、カマドを南東～南側の壁に作り付けています。擦文文化独自の集落景観が出現しました。

カマドと万葉集

竈には　火気ふき立てず　甑には　蜘蛛の巣懸きて　飯炊く　事も忘れて…

有名な山上憶良『貧窮問答歌』（万葉集）の一節です。考古資料でも、本州ではカマドに甑（こしき）が伴う事例が多くあります。甑とは、カマドに掛けた甕に重ね入れた蒸し器のことです。

擦文文化ではオオムギやアワ、ヒエなどの穀物類が栽培されていました。カマドと農耕の普及とは関係が深そうです。擦文土器には甑がほとんど見られないので、蒸す調理法よりも炊く（煮る）調理法の方が一般的だったのかもしれません。甕を掛け口に固定した状態のカマドの発見事例が少ないのは、そのためかもしれません。

第１回調査成果報告会の開催

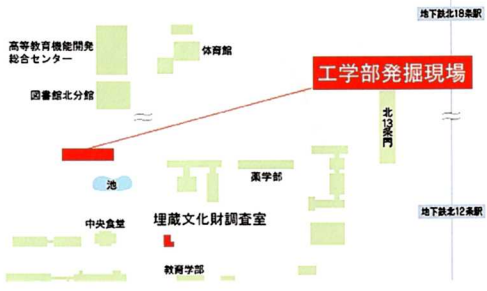
埋蔵文化財調査室による調査成果報告会が平成 20 年 1 月 13 日に、学術交流会館第 3 会議室で行われました。今回は「大学構内の自然と文化の歴史」をテーマにして、構内の遺跡と森林文化との関わりや、平成 19 年度に発掘調査した K39 遺跡薬学部研究棟地点の成果の概要が発表されました。発表の後、あいにくの吹雪の天候にもかかわらず約 50 名の方々が薬学部研究棟地点や埋蔵文化財調査室展示室の見学ツアーに参加しました。

お知らせ

遺跡調査見学会の開催

大野池北側の工学部共用実験研究棟地点では、現在、遺跡の発掘調査をおこなっています。続縄文文化や擦文文化の遺物・遺構が出土しております。現地説明会では、当時の生活のあとや、埋没河川の様子、出土した土器や石器などについて説明いたします。

日　時：平成20年7月17日（木）
　　第1回　12時30分～
　　第2回　13時00分～
　　（説明は二回にわけて実施いたします）
場　所：工学部共用実験研究棟地点　現地入口集合
参加費：無料（参加に関する事前連絡の必要はありません）
※雨天の場合は翌日（7月18日）の同時刻に順延いたします。お問い合わせは北大埋蔵文化財調査室（Tel　011-706-2671）まで。



編集後記

キャンパス内を北上していた旧サクシュコトニ川の両岸には千年ほど前の擦文文化の集落が点在していました。カマドから煙が立ち上る集落景観に想いを馳せながら、昼休みのひと時、再生されたサクシュコトニ川の初夏の岸辺を散策してみてはいかがでしょうか。今回の特集の編集には文学研究科大学院生の星野二葉さんに参加していただきました。（小杉）

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター　第３号
平成 20（2008）年 7 月 7 日
発行：北海道大学埋蔵文化財調査室
〒060-0811　札幌市北区北 11 条西 7 丁目
電話：011-706-2671　ファックス：011-706-2094
e-mail：jun-ta@let.hokudai.ac.jp
URL：http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/maibun.html